

小松敏弘

現代世界と民主的変革の政治学

ラスキ / マクファースン / ミリバンド

審査委員 主査 中谷義和
副査 小堀眞裕
副査 本山 敦

〔論文内容の要旨〕

(1) 本論文の構成

本論文は4部構成、全18章と「結びにかえて」と題する跋文からなり、その表題は以下である。

第部：序論

第1章 本書の課題，問題意識，構成

第2章 現代政治学における自由論の再構築

グリーン，ラスキ，マクファースンを中心にして

第部：ラスキと現代資本主義国家

第1章 ラスキ国家論の再構成 ラスキの現代資本主義国家論

第2章 マクファースンの先進資本主義国家

第3章 現代資本主義国家の性質についてのマクファースンの分析

第4章 ミリバンドの現代資本主義国家論

第5章 ラスキとマクファースンのゆとり理論

第6章 ラスキの官僚制論

第7章 ラスキの軍隊論 軍隊の二面性

第8章 ラスキの政党制論 ラスキの二党制論

第9章 ラスキのマス・コミ論

第部：ラスキと社会主義国家

第1章 ラスキの現存社会主義観

第2章 ラスキのスターリン観

第3章 マクファースンの社会主義国家論

第4章 ミリバンドのスターリン観

第 部：ラスキと発展途上国

第1章 ラスキの第三世界論 ナショナリズム論を通して

第2章 マクファースンの発展途上国型の民主主義論

第3章 ミリバンドの第三世界論

結びにかえて

(2) 本論文の課題設定

序論 の第1章でも紹介されているように、本論文はラスキ(H. J. Laski, 1893-1950)、マクファースン(C. B. Macpherson, 1911-87)、ミリバンド(R. Miliband, 1924-94)の政治理論を「民主的変革の政治学」という視点において体系化しようとするものである。この3人の研究者は時代をやや異にしつつも、濃淡の差はあれ師弟関係にあり、また「戦争と革命の時代」に生き、「自己実現」の政治学の理論化に腐心したという点では問題意識を共有している。本論文は、3人の理論家の政治学的営為を辿ることで「民主的変革の政治学」の理論的彫琢の内実を照射し、これを体系化することを課題としている。以下、本論の行論を概括する。

(3) 本論文の要旨

第 部序論(全2章構成)では、分析の対象とした3人の理論家が時代状況を異にしつつも、ともに「自己実現」の理論化を課題とし、ラスキとマクファースンはグリーン(T. H. Green, 1836-82)の理想主義の「自由論」とマルクス主義を摂取すべきであるとの意識が強かったと、また、ミリバンドはマルクス主義的「自己実現」論に立っているとしている。本論文は、まず、グリーン「人格的自由主義」論を紹介したうえで、ラスキとマクファースンの自由論について検討することで思想の継承と展開の内実を辿ることをもって行論の起点としている(第2章)。

この検討から、グリーン「積極的自由」観は「消極的自由」観に立脚した「自由」観であり、この点ではラスキ、マクファースンにも共通の認識を認めることができる。したがって、イギリス理想主義学派と多元主義学派とは対立する位置にあるとみるより、「自由」の概念を「自己実現」と結びつけていたという点では継承関係にあると見なすことができる。

ラスキは資本主義社会における「自由」と「平等」の認識を基礎として、多元主

義国家論や産業組織論を展開し（いわゆる「初期ラスキ」）、この視点が、さらには、多様な社会集団からなる「自由軍の兵士」を主体とする「同意による革命」を媒介とした「無機能的所有階級」の廃棄と「計画的民主主義社会」論（参加型で国有と私有の並存様式）という構想に連なっていることを明らかにしている。また、マクファースンは、イギリス自由主義の理論的伝統は「所有的個人主義」に立っているとすることで、さらには、バーリン（I. Berlin 1909-97）の「自由論」が所有諸関係を無視した「積極的自由」批判であるとし、これを批判的に検討することで反抽出的な「発展的民主主義」論を提示していることを明らかにしている。

第部（全9章構成）では、ラスキ、マクファースン、ミリバンドの資本主義国家論（第1～4章）、ラスキとマクファースンの「ゆとり」論（第5章）、ラスキの官僚制と軍隊の理論（第6章と第7章）、ラスキの政党制論とマス・コミ論（第8章と9章）が巨細に分析され、検討に付されている。すなわち、第1章はラスキの資本主義国家論にあてられ、彼の「多元主義的国家」理解の基点となった「社会学的個人主義」観が関係論的視点から二重の機能の複合的統一体として国家を捉えるという発想と結びつき、ここから“対抗ヘゲモニー”を重視することになっただけでなく、「産業協議会」や「諮問委員会」の設立構想に連なっていることを明らかにしている。したがって、ラスキには同時代人にあたるグラムシ（1891-1937年）の、あるいは、後のプーランザスと同様の「国家」理解が認められると指摘している。また、マクファースンは、自由民主主義体制における個人的自由主義を積極的に評価しつつも、“力”の「移転」や「所有的個人主義」を基礎とした資本主義的市民社会に「発展的個人主義」の阻害要因を認め、「参加民主主義」に依拠し、市場原理を組み込んだ社会的所有型社会を展望していると位置づけるとともに（第2章と第3章）、「狭いプロパティ」概念を克服し、政治参加や「人民自治」をも含む方向で“プロパティ”の概念を理論的に再構築すべきであるとしていることを明示している。そして、ミリバンドにも「国家」の階級機能と緩和機能という「二面性」が認められるとともに、「資本主義社会の民主的性格の拡大」という視点から“ヘゲモニー政党”と大衆運動との連携をもって資本主義の民主的変革を志向し、「自己実現」を期すべきであるとしていることを明らかにしている（第4章）。以上のように、ラスキ、マクファースン、ミリバンドの資本主義国家論の特徴を整理したうえで、本論文は、「ゆとり」論、官僚制論、マス・コミ論へと行論を移している。

第5章は、現代の、いくつかの代表的な「ゆとり」論の整理を踏まえて、ラスキとマクファースンの労働概念や労働過程について分析している。両者はいずれも、

資本主義的生産様式における過重労働と「自己実現」との矛盾の認識をもって、いわゆる労働疎外についてラスキは労働時間の短縮と労働者の自主管理において、また、マクファースンは労働手段へのアクセス権を確立することで“ゆとり”を拓くべきであると論じているとする。さらには、ラスキの官僚制論はウェーバーの機能的・組織原理的視点とは違って、官僚制の権力構造の社会学的分析を踏まえて、その階級的性格を指摘するとともに(この視点はミリバンドも継承)、その“偏向”性や「逆機能性」(遅滞や繁文縟礼)に対処するためには行政参加と行政統制(制度的・非制度的統制)について論じていることを明らかにしている(第6章)。また、ラスキとミリバンドの軍隊論も紹介し(第7章)、軍隊が支配的秩序の維持機能のみならず、例外的とはいえ改革機能も果たしようという点で「二面的」性格を有していると判断していると位置づけている。さらには、ラスキの政党制論とマス・コミ論にも言及し(第8章と第9章)、ラスキは、歴史的経験と選挙民の政権選択という視点から小選挙区型2党制を提唱しているのにたいし、ミリバンドは2党制の同質化傾向から、これに批判していることを明らかにしている。さらに、「正統化機能」という点からラスキとミリバンドのマス・コミ論に止目し、マス・メディアの政治的教化機能や階級的性格を認識することで、「対抗ヘゲモニー」の成立に期待を寄せていたことを示している。

第部(全4章)が分析の対象としているのは、3人の社会主義国家と、いわゆる「スターリン体制」の問題である。

これは、3人が「自己実現」と「自由」の問題を資本主義社会の批判的検討をもって模索していることからみてもテーマとして設定して然るべき課題である。3人はいずれもソ連の成立を同時代人として目撃し、ラスキは1946年にイギリス労働党の親善使節団の一員としてソ連を訪問し、スターリンとも会談しているが、彼は冷戦の盛期に、56年の「スターリン批判」を知らずに、またマクファースンは89年の東欧革命期を見ずに亡くなっている。そして、ミリバンドだけが91年のソ連の崩壊を経験しえている。

第1章はラスキの晩年の著作(43年の『現代革命の考察』、52年の『岐路に立つ現代』、46年の「スターリンについての私の印象」)を、また、マクファースンの『現代世界の民主主義』(1966年)を、そして、ミリバンドの『ソシャル・レジスター』所収論文を中心として3人の社会主義論とスターリン観について分析している。すなわち、第1章では、ラスキのソ連社会主義論を対象とし、彼がその“罪状”と“過誤”(例えば、思想統制と肅清、民主集中制と個人崇拜など)を鋭く突きつつも、「特殊事情」(革命後の内乱と干渉戦争、対独戦と封じ込め政策)を斟酌

すべきものとしていることに、また、党内民主政の原則やソ連社会主義体制の分析には弱点を残しているし、市場経済型社会主義像については十分な検討には及びえなかったとする。また、第2章の「ラスキのスターリン観」はドイツチャーなどのスターリン論を踏まえて、ラスキの11項目に及ぶスターリン観を個別に検討し、ラスキのスターリン像や現存社会主義の実態理解には正確なものが認められるが、この点でも歴史的特殊事情という位置づけも反映して、理論的弱点を残さざるをえなかったことを明らかにしている。

ラスキの社会主義国家論の検討は、次いで、マクファースンとミリバンドのスターリン論の検討に継承されている。すなわち、第3章は、マクファースンはソ連社会主義体制を「前衛国家」と規定し、この体制に「道徳的長所」（「力の移転」の廃棄）のみならず、「道徳的短所」（市民的・政治的自由の欠如）を認めていたことを紹介するとともに、その後の、あるいは彼と同時代人の主要な社会主義国家論との交差において、マクファースンの「道徳的短所」の克服論には歴史的にも理論的にも楽観的過ぎるものであったと指摘している。というのも、ソ連共産党の組織原則が国家の組織原理に転化し、後者と一体化していることにソ連社会主義体制の克服しがたい問題を看取しているからである。また、ミリバンドのスターリン観においては個人独裁の性格が強調されるとともに、スターリンの死後に至っても、この体制は「寡頭制的集産主義（集団主義）」に転化したに過ぎないと見なされていることを紹介し、第 部 の課題とした「ラスキ、マクファースン、ミリバンドの現存社会主義観」を「罪状と過誤」の認識、「歴史的特殊性還元論」、スターリン観、ソ連における“平等”の内実、社会主義像の諸点に即して整理することで結んでいる。いずれの整理と指摘も関連資料と先行研究を踏まえた行論にあるだけに説得的なものとなっている。

第 部（全3章）は、ラスキ、マクファースン、ミリバンドの、いわゆる「途上国」ないし「第三世界」論の分析にあてている。したがって、本論文の構成からすると、第 部 では3人の論者の先進資本主義国論（第一世界論）を、第 部 では現存社会主義国論（第二世界論）を扱い、そして第 部 では途上世界論（第三世界論）の分析の検討に移っていることになる。

第1章では、1920-30年代のラスキのナショナリズム論を通して「第三世界」観を検討し、第三世界の従属状況の克服を国内の経済改革による“平等”の実現にのみならず、国際関係論的視点から「非主権国家」型世界秩序の形成に求めているものと位置づけている。また、この展望に内在する諸問題（例えば、第一世界の第三世界への依存構造の継続や社会主義の帝国主義化など）について検討している。ま

た、第2章ではマクファースンの低開発国型民主主義分析に視点を移し、マクファースンがいわゆる一党制型「開発独裁」ないし「権威主義体制」における民主主義の欠如(道徳的短所)と「力の移転の欠如」(道徳的長所)の併存状況を認識しつつも、これは物質的生産力の上昇をもって克服しうることであると展望していたとする。こうしたマクファースンの理解を踏まえて、本論文は、マクファースンの低開発国論には経済的改善と民主主義との相関性や世界資本主義体系への従属化と民族ブルジョアジーの存在など視野に収めるべきことが多いという点で弱点を有しているとする。そして、第3章では、ミリバンドの第三世界論についての検討に移り、彼の理論の特徴は先進資本主義諸国政府や多国籍企業と結びつけて「第三世界の経済と権力の構造」を捉えていることに求め、さらには、ラスキ、マクファースン、ミリバンドの発展途上世界に関する理解の異同を整理して結んでいる。マクファースンとミリバンドの途上国政治論については紹介もされてきたが、ラスキについては不十分であっただけに、ラスキの途上国政治論を関心の対象として設定したという点では重要な業績といえる。

跋文ともいふべき「結びにかえて」の章では、ラスキ、マクファースン、ミリバンドにあって共通に模索されていたのは「自己実現」や「潜在的能力の実現」という「当為としての社会像」であり、その模索の認識において歴史と現実が、また、諸理論が分析され、これを踏まえて“社会像”が提示されたのであって、時代を異にし、また、認識と展望に違いをとどめつつも「民主的変革の政治学」という点では理論的課題を共通にしていることを確認して本論文を閉じている。

〔論文審査の結果の要旨〕

本論文審査にあたっては、2007年11月30日午後5時より午後7時30分まで博士学位審査公開研究会を開催した。審査委員3名のほか、6名の教員と院生が参加し、論文の全体的構成や執筆の意図について、また、今後の課題について報告を受け、その後、活発な質疑応答を行った。

この公開研究会も踏まえて審査委員会は以下のように評価する。

本論文は、時代をやや異にしつつも、師弟ないし知的交流関係にあり、現代の民主主義理論の代表的論者である3人の研究者、つまり、ラスキ、マクファースン、ミリバンドの理論の思想的連関を辿るとともに、その共通の課題を「民主的変革の政治学」に求め、その位相を定めようとする意欲的労作である。

そのために、本論文の第 部は、3者の「自由」論にはグリーンの「積極的自

由」の理念が「消極的自由観」と交差しつつ底流していると判断し、この点を明らかにすべく、まず、グリーン「自由」観を紹介している。これを受けて、ラスキとマクファースンの「自由論」の検討に入り、初期ラスキは消極的自由を前提としたうえで積極的自由論の理論化に向かったとする。その表現が国家権力からの自由と国家を調整主体とする連立的社会構造に自由の実現を求めるという多元的社会像に連なり、この自由観は、さらに、後期ラスキに至って計画的民主主義社会論を展開することで積極的自由の意味が強調されることになったとする。また、マクファースンの自由論はバーリンの自由論を批判的に検討し、バーリンの「消極的自由」(強制の欠如)では資本主義社会における「抽出の自由」や「力の移転」の“自由”による“不自由”の問題が解決されえないとの認識をもって、消極的自由は「反抽出的自由」に、また、積極的自由は自己管理ないし自己支配と反後見主義的自由として再規定され、両者の複合において「自由」観が指定されることになったと位置づけている。本論文は、こうした自由観の緊張関係が、3人の論者の国家論・政党論・社会主義論・途上国論に底流し続けているとするだけに、本論文の構成としては妥当な位置にあるし、説明にも説得的なものが認められる。

第 部は、第 部の論述を踏まえ、ラスキ、マクファースン、ミリバンドの「自由観」を基礎に、彼らが資本主義国家、官僚と軍隊、政党制、マス・コミ、および“ゆとり”について、どのような理論を展開したかという分析にあてられている。この論文の構成からすると、「自由」論の具体的展開の分析に位置している。まず、ラスキにおいてはグリーンの影響も受けて、国家を「社会善」の場であると認識しつつも、この理念との乖離の認識をもって、また、階級的視点と共同体の理念の両者から国家にアプローチしていることを明らかにしている。また、マクファースンは「自己実現」を「所有的個人主義」の止揚に、そして、ミリバンドは民主政の社会主義的拡大に求めるとする。こうした資本主義国家論は官僚制論や軍隊論と結びつくとともに、両者の二面性の指摘や「官僚制防止案」の提言に連なったとする。さらには、政党制についてはラスキとミリバンドは意見を異にしつつも、民主政の現実的展開という点では発想を同じくしているし、マス・コミ論については、政治支配の正統化論という点から鋭い分析が認められるとしている。いずれの指摘も先行分析や関連論の論点を踏まえるとともに、資料を丹念に渉猟しつつ論述しているだけに、とりわけ第 部との連関がつけられているだけに手堅い行論となっている。

第 部は、3人が同時代人として観察した社会主義国家の実態分析を社会主義観と交差させて論じている。これは、彼らの「自由」の理念の具体像の模索からする

と設定されてしかるべき課題である。この点で、本論は、3者の現存社会主義国家観のポイントを的確に腑分けするとともに、現代の社会主義理論の地平も踏まえて3者の理論的異同を考察しているという点では貴重な成果であるといえる。

第 部は、ラスキ、マクファースン、ミリバンドの途上諸国論について検討している。この視点は、第 部の社会主義論とならんで、3人の理論の整理という点では不可避の位置にある。この点で、本論文は、3者がナショナリズムと民主主義の原理から途上諸国の実態をどのように捉え、評価したかについて、また、その従属的状况をどのように克服しようかという展望を持っていたかについて検討しているが、いずれの分析も、3者の基本的資料に依拠し、また、関連文献と比較しつつ考察した行論にある。とりわけ、ラスキの国際関係論については、この問題がガヴァナンス論とも結びついて検討の対象とされるようになってきているだけに、今後の研究の深化という点で重要な研究業績といえる。

以上のように、本論文は、ラスキ、マクファースン、ミリバンドの政治理論を「民主的変革の政治学」で括り、その分析の視点を「自由論」、「資本主義国家論」、「社会主義国家論」、「途上国体制論」の視点から整理し、基礎資料と関連文献を交差させつつ考察している。3者の個別研究については、それなりの成果が残されているが、彼らの理論的営為を継承と交差の視点から包括的に考察した研究は存在しない。また、扱っている領域が多岐にわたるあまり、体系的に欠けるのではないかという懸念も起ころうが、「民主的変革の政治学」というテーマで括ろうとすれば扱われてしかるべき論点であり、3者が問題意識を共通にしている「自己発展」という課題の個別領域に即した分析であって、むしろ体系的構成と行論にあるといえる。

ただ、いくつかの課題ないし疑問も残されていないわけではない。分析の対象とした3人の論者は師弟関係と知的交流関係にあったとはいえ、時代を異にしているし、その展開も歴史のなかの営為であるだけに、3者の思想展開を歴史との交差をもって明示したうえで理論的異同を整理するという方法を採用すれば、もっと行論は厚みと説得力を増したと思われる。この点は現在の地平から3者の理論を捉えるという、やや後知恵の評価も散見されることと結びつくことになったと判断する。また、国家の「相対的自律性」の概念にかかわっては疑問も残されている。というのも、本論文は3人の論者が国家を“二面性”ないし“二重機能”の視点で捉えているとしているが、国家が階級機能と社会的機能を果たさざるをえないということは、社会的諸関係の“凝縮”という視点からすると首肯しうることであるにせよ、プー

学位論文審査要旨（小松）

ランザスの「相対的自律性」という概念が有効であるとしても、国家の二重機能と分けて捉えるべき概念であって、この点では、国家論レベルにおける一層の理論的検討が求められる。

本論文は深めるべき論点や課題を残しているとはいえ、審査委員会は、これを望蜀にとどめうるものであって、ラスキ、マクファースン、ミリバンドという3人の政治研究者の同時代人としての現状分析と理論的営為の連関を縦横に整理し、「民主的変革の政治学」でまとめたということは積年の営為の貴重な成果であり、今後の研究の礎石を据えることで学界に裨益しうるものと判断し、全員一致をもって博士の学位を授与するに相応しいと判断した。

〔試験または学力確認の結果の要旨〕

本学位申請者は、本学学位規程第18条2項の該当者であり、広島大学大学院社会科学部博士後期課程を満期退学後、九州東海大学助教授を経て、現在、同大学教授である。また、本論文の内容、および資料の渉猟と読解力には堪能な外国語能力が認められるので、本学学位規程25条1項により試問および外国語試験を免除した。

以上をもって、審査委員会は本学位申請者に博士（法学 立命館大学）の学位を授与することが適当であると判断した。

以上